

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 24 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370156

研究課題名(和文) 日韓テレビドラマおよび映画にみる大衆の欲望の特徴に関する研究

研究課題名(英文) A study on the features of the desires of the masses seen in Japanese and South Korean TV dramas and movies

研究代表者

金 鉉哲 (KIM, HyeonCheol)

東北大学・高度教養教育・学生支援機構・講師

研究者番号：80361210

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：この研究では日韓のテレビドラマと映画における大衆の欲望の特徴を明らかにした。人気テレビドラマと映画にはその時代の数多くの人々が欲望する理想的な主人公、人間関係、問題の解決方式などが入っているとされる。特に、2000年以降の韓国リメイク映画やドラマには「楽観的な結末」が顕著に現れる特徴がある。リメイクされた韓国作品には愛なしでは生きることができない「大衆の幻想」が強調された。その結果、テレビドラマでは現実の苦痛や辛さという重いテーマはほとんど消えてしまった。その理由は大衆が無意識的に非現実的な愛のファンタジーを好むからである。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify the features of the desires of the masses seen in Japanese and South Korean TV dramas and movies. Box office returns and viewership are used as an important criterion to measure the value of TV dramas and movies. Therefore, it can be said that popular TV dramas and movies show ideal protagonists, human relationships, and systemic resolution of problems as desired by a large number of people of that era. Therefore, through the analysis of TV dramas and movies that were big hits, this study clarifies the features of the modern desires and fantasies embraced by the masses in Japan and South Korea. Since 2000, one of the distinctive features in the remakes of Korean movies or TV dramas has been the happy ending. In these remakes, the dreamy narrative that is, fantasy of being unable to live without love has been emphasized. As a consequence, the serious theme such as the reality of human suffering and pain has almost disappeared.

研究分野：日韓比較文化

キーワード：日流 日韓テレビドラマ 日韓映画 リメイク 大衆の幻想 楽観的な結末

1. 研究開始当初の背景

日韓文化交流史において、21世紀は過去とは違う新たな時代である。21世紀に入って日本では韓国の大衆文化に対する爆発的な関心が起き、この傾向を「韓流」と定義している。テレビドラマ、映画、歌(K-pop)から始まった関心は韓国の政治、経済、社会、教育、文化の分野にまで拡大している。この韓流については、数年前までは一時的なブームに過ぎないだろうとする予測もあったが、実際には10年以上持続しており、老若男女を問わずその熱気はますます高まっている。最近の韓流は日本で成功した経験とノウハウに基づいて徐々にヨーロッパと米国まで進出し、新しいコンテンツ産業のビジネスモデルとして注目されている。

このような大衆文化に関する関心は、韓国においても同様である。特に、日本の漫画やアニメーションの人気は非常に高く、最近では日本のテレビドラマや映画の原作をリメイクする場合も増えている。特に、2007年にリメイクされた「白い巨塔」は韓国社会に大きな話題と論議を呼び起した。この作品は韓国社会が抱える深刻な問題と現代人の過剰な欲望を非常によく形状化した作品として高く評価された。その理由は韓国大衆が求めている「巨大な組織と個人の対立」、「魅力的な主人公の生き方」、「典型的であり、悲劇的な結末」の要素を取り入れたためである。

日本、韓国を問わず、現代人は余暇時間にテレビドラマや映画を鑑賞する機会が多い。テレビドラマや映画を見るのは、現実の世界とは別の世界で生きたいという無意識の欲望が反映されているとも言える。製作の企画段階からすでに視聴者や観客の関心事項を分析し、それを戦略的・計画的に取り組むのはよく知られた事実である。結局、人気テレビドラマと映画には現代人の集団的な欲望が反映されている。

特に、日韓比較研究は日本と韓国の大衆が持っている欲望の相違点を明確に理解できるという長所がある。日韓両国で共に人気が高い作品もあれば、日本ではあまり人気がないのに韓国では非常に人気が高い作品も存在する。このような現象の原因は大衆の求める欲望の違いのためである。つまり、日韓の比較研究は日本と韓国の大衆が持っている欲望と幻想の違いを明らかにすることができる。

しかし、先行研究を考察してみると、現代大衆の特徴を理解する方法として日韓のテレビドラマや映画のテキストを分析した研究はほとんどない。「韓流」と関連した研究があっても、日本における韓流現象の特徴や韓国側から見た韓流の成果報告程度に留まっている。その理由は未だにテレビドラマや映画が学問的な研究テーマとして認識されていないためである。したがって、本研究ではこれまでの研究姿勢を反省し、日韓のテレビドラマと映画を研究の対象として、大衆文

化の特徴を比較する。比較する過程で自然と日韓の大衆が求めている理想的な世界、欲望と幻想、問題認識と解決方法の傾向が明らかになる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日韓のテレビドラマと映画における大衆の欲望の特徴を明らかにすることである。テレビドラマ・映画において視聴率と興行収入は、作品の価値を測定する重要な基準として使われている。したがって、人気テレビドラマと映画にはその時代の数多くの人々が欲望する理想的な主人公、人間関係、問題の解決方式などが入っていると言える。そこで本研究では、大ヒットしたテレビドラマと映画の分析を通し、日本と韓国の大衆が抱えている現代人の欲望と幻想の特徴を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

本研究は、5段階に分けて進行する予定である。第1段階は、テレビドラマと映画の客観的な資料の収集と考察である。基本的な資料の収集を行い、その資料の特徴と傾向を分析する。日韓で視聴率と興行収入が高かったテレビドラマと映画を中心に日本、韓国、海外作品とに分類し、映像、台本、ポスターなどの1次資料を収集する。調査対象は2001年から2012年まで発表された作品が中心となるが、韓流ブールの前後の特徴と傾向を比較するために補助資料として1980年度、1990年度の作品も資料として収集する。第2段階は、収集した資料の整理と分析作業である。資料の分析時には相互関係で発生する「反復と差」を均衡的に検討する予定である。この過程で中心となる検討事項は、「普遍性」と「特殊性」である。「普遍性」は日本と韓国で人気が高いテレビドラマと映画の類似点である。テーマ、ストーリー構造、葛藤類型、終結方式を中心に人気作品の基本的な特徴を調べる。「特殊性」についてはテレビドラマと映画の中で民族、地域、国家のアイデンティティーと関連した集団的な好みかどのように現れているかを調べる。特に、日韓の視聴者と観客が求めている欲望と幻想の相違点については、小論文の形式で発表する予定である。第3段階は、不足資料を補填する過程である。第2段階の資料整理と分析の過程で、日本と韓国の資料を比較する時、資料が不足した場合さらに実証的な基礎資料を補充する。日韓のテレビドラマと映画を比較する時、核心的な要素は「魅力的な主人公」、「興味深い対決の構図」、「問題解決と結末方式」となる。そして、映像芸術としての日韓作品の表現方式についても共通点と相違点の特徴を分析する予定である。分析対象はショット(shot)、シーン(scene)、シーケンス(sequence)、カメラアングル(camera angle)の使用方式である。この過程で日本と韓国の大衆の好みと一般的な表現方式の特

徴が明らかになる。第4段階はより深層的な資料の収集と資料の客観的な価値を検証するために専門家の助言を得る過程である。第5段階は小論文で年間の研究の成果を発表することである。

4. 研究成果

平成25年度には、ドラマ・映画の資料収集と映像コンテンツの概念に関する基礎調査を行った。2001年から2012年まで日本の原作と韓国のリメイク作品の間にはどのような変化があるかについても注目した。日韓で話題になったドラマと映画作品を中心に人気の傾向性についても調べた。特に、この基礎資料調査の過程で日本と韓国ではコンテンツ概念の差が存在することが明らかになった。

韓国の「コンテンツ産業振興法」では、コンテンツは構成要素として資料と情報の意味を持つが、日本の「コンテンツの創造、保護及び活用の促進に関する法律」では、コンテンツは構成要素ではなく、完成されたものという位置づけである。その結果、韓国ではニューメディアの保存および流通方式を前提とした「文化コンテンツ」という用語が強調された。コンテンツの価値は文化的な属性によって決定されるという論理である。韓国においてコンテンツは単なる商品の意味ではなく、最終的には国をブランド化する付加価値の高い材料として注目している。そのため、韓国の独創的な文化要素が含まれているコンテンツの重要性が益々強調された。その代表的な成功事例がまさに「韓流」の熱風である。

しかし、韓国の「文化コンテンツ」は「構成要素」、「生産・流過程」、「最終的な著作物」を全て含めている大規模な概念でよく使われている。このような意味からみると、この世にコンテンツのカテゴリに含まれていない対象はないことになる。曖昧で法律的なコンテンツの定義によって学術的な概念の定義にも混乱を加重させたと指摘されている。つまり、法律的に定義されたコンテンツの概念は、専門家の十分な議論を経て合意されたものではないので、様々な抜け穴が存在する。特に、文化観光部が主体となって作成された法律のために、「文化」というキーワードが強調されたのも韓国のコンテンツ概念の特殊性である。

これに対して日本では、大衆が楽しむ娯楽的な要素であるエンターテインメント属性を強調される特徴があった。つまり、コンテンツは大衆の選択と消費が重要であり、その中核には「楽しみ」という価値を生産出来るかどうか強調された。これらの代表的な例として、日本の特有の「同人活動」がある。原作からキャラクターや世界観を借用して2次、3次の創作物が作られると、それも新しい創作物として独自のオリジナリティを持っているという認識である。このように日本のコ

ンテンツ概念で強調されているのは、創作物はいつでも新しいオリジナリティを持った新しい創作物に変化可能であり、新たなコンテンツが消費される過程には大衆の喜びと欲求がエネルギーとして動作しているということである。

結局、日本と違って韓国のテレビドラマと映画には時代意識と人間の心理を理解できる文化的な要素が必ず入らなければならなかった。このように日韓の映像コンテンツは、基本的には同じ概念から出発したが、最近はその概念の範囲が少しずつ変化するようになった。

平成26年度には、リメイクされた韓国映画について注目し、具体的に作品の分析を行った。特に『オールド・ボーイ』、『火車』、『容疑者X』を中心に、日本原作のリメイク傾向について調べた。『オールド・ボーイ (Old Boy)』(2003年)は、漫画『ルーズ戦記 オールド・ボーイ』(土屋ガロン原作、嶺岸信明作画)を原作とした映画である。『オールド・ボーイ』は世界で韓国映画の名を馳せた代表的な作品である。この映画は、原作の「ユニークな世界観」をそのまま受容し、原作にはない「復讐のスピーディーな展開」、「魅力的なキャラクター」を新しく作り上げた。リメイク映画でも復讐を重要な素材として使用しているが、その復讐の過程に現れる主題意識は「存在の不完全性」である。人物の過激な暴力シーン(scene)とミステリアスな幻想シーン(scene)は不合理であり、非現実的な世界を生きている個人の虚しい姿を強調している。しかし、『オールド・ボーイ』以後、多くの日本作品がリメイクされたが、そのほとんどは大衆的な人気を得ることはできなかった。この中で作品としても、興行収入面でも成功した独特な作品が『火車』である。『火車』(2012年)は推理小説『火車』(宮部みゆき 作)を原作とした映画である。この映画も原作の「大量生産、大量消費という欲望の世界観」をそのまま受容し、原作にはない「愛に執着する人物」、「同情と憐憫の結末」を新しく作り上げた。『容疑者X』(2012年)は推理小説『容疑者Xの献身』(東野圭吾 作)と映画『容疑者Xの献身』(2008年)を原作とした映画である。この映画も原作の「ユニークな世界観」をそのまま受容し、原作にはない「メロドラマ方式の展開」、「悲劇的な主人公」を新しく作り上げた。

特に、最も成功したリメイク作品として有名な『火車』の新しい結末をみると韓国の大衆が持っている欲望を理解することができる。『火車』の結末は韓国大衆の願い通り悲劇的な主人公の死である。誰が加害者であり、誰が犠牲者であるかという疑問を投げながら、弱い個人の誤った選択と現代人の悲劇的な運命を表している。しかし、不幸な現実を克服できる解決策として提示するのは「純粹な愛」である。愛は善悪の判断よりも上にあ

る価値であり、すべての問題を解決できる唯一無二の方法である。結局、愛はすべてを超越し、愛なしでは生きることができない「大衆の幻想」を強調している。このような錯覚と欲望をそのまま従っているのが、まさにリメイクされた映画『火車』である。

結局、大衆的な関心を集めたリメイク映画はミステリーとサスペンスのジャンルに集中している。原作の「世界観」をそのまま受け入れた理由は、ユニークな人物関係とストーリー展開のためであり、原作と全く違うスタイルで「問題認識と解決方式」、「主人公のキャラクター」を作り上げた理由は、韓国大衆の欲望に従ったためであることが明らかになった。

平成 27 年度には、テレビドラマにおける日韓の大衆が持っている欲望と幻想の特徴を調べる研究を実施した。特に、2000 年代から韓国国内では本格的に日本の漫画とドラマをリメイクする作業がブームになった。2010 年度以後には韓国でリメイクされる外国作品は、ほとんどが日本原作である。この新しい「日流」ブームの理由は、ドラマ制作環境の類似性、似た情緒を持つ視聴者、検証済のテキストという魅力的なメリットを持っているためである。この日流ブームによって、韓国コンテンツの競争力が弱くなるという内部批判もあった。このような現状の特徴を分析し、日韓の大衆が何を求めているのかを明らかにした。

韓国においてリメイク作業は、テレビドラマ、映画の両方で一般的な現象として定着しつつある。しかし、作品の中では原作の人気を越えた作品もあり、一方で全く人気がなかった作品もある。このような原因は大衆が好む人物象、ストーリー展開、葛藤と解決構造に「典型的なパターン」が存在するためである。韓国でリメイクされた TV ドラマ「JIN-仁-」は最近の日流ブームの特徴をよく示している代表的な作品である。基本的には「運命と個人の対決」、「英雄のキャラクター」、「継続的な障害物の登場と克服の過程」という伝統的な人気要因もあるが、現代的な変容によって新しく「苦悩する現代人」、「性格的な脆弱性(vulnerability)」、「楽観的な結末」という新しいパターンも作り出した。「苦悩する現代人」は主人公の性格的な特徴である。リメイクされた作品に登場する主人公は、信念を持っているが、常に問題状況で苦悩に満ちた人物である。韓国の大衆は完璧な英雄より現実的な人物に共感する特徴がある。「性格的な脆弱性(vulnerability)」の要素は大衆にもっと魅力的な人物として認識される傾向がある。主人公は超越的な能力を持っているにもかかわらず、小さなことに胸を痛めて苦しむ性格を持っている。「楽観的な結末」は 2000 年以降の韓国ドラマで顕著に現れる特徴である。最近のテレビドラマで現実の苦痛や辛さという重いテーマはほとんど消え

てしまった。その理由は大衆が無意識的に非現実的な愛のファンタジーを好むからである。少なくともドラマでは現実的にありえない結末を見たいのである。しかし、リメイク過程で度々発生する問題点として、過剰なモチーフを使用した結果、全体的なストーリー展開の統一性が崩れる傾向もあった。リメイクの過程で頻りに現れている問題は原作の世界観と物語を構造としてそのまま借用しながらも、登場人物は韓国的な情緒を持った新しい人物として作り出すからである。この過程で問題が発生する根本的な理由は、日本と韓国の大衆が同時に共感できる普遍性と特殊性を正しく理解していないためである。つまり、リメイクの過程で些細な部分だけを韓国式に変容した結果、全体の統一性に問題が発生する。この問題を解決するためには韓国の視聴者も納得できる世界観、ストーリー展開、葛藤と対立、解決方法などを作り出すべきである。

このような問題も多くあるが、最近の日流ブームの理由は「ストーリー展開」と「人物キャラクターの設定」において韓国の大衆が共感しやすい特徴を持っているためである。韓国で人気が高い日本原作は特徴として、運命と対決する個人が登場し、その人物の心理描写が優れているという作品が多かった。しかし、韓国式にリメイクする過程で「世界と個人」の対立構造は弱くなり、「関係性を強調する構造」に変化した。結局、大衆が求めている「愛と友情」が中心となる傾向が強かった。韓国の大衆の関心は運命と戦う個人の悲劇ではなく、家族・恋人・仲間の関係から発生する様々な問題と葛藤にあることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

金 鉉哲、韓国と日本におけるコンテンツ概念の比較研究、査読有、韓国学研究 45、高麗大学韓国学研究所、2013. 6、213~245

金 鉉哲、日韓の山岳信仰に関する考察、査読無、智異山南岳祭の伝承と祭りに関する研究 求礼文化院、2013. 11.15、127~146

〔学会発表〕(計 2 件)

金 鉉哲、「小説の映画化過程における大衆の欲望に関する研究」、Korean civilization: sources & prospects、2013 年 11 月 22 日~23 日、Poland University of Warsaw、

金 鉉哲、「韓国 TV ドラマのリメイク特徴に関する研究」、The Central and East European Society of Koreanology、2015 年 10 月 29 日~

30 日、Russia Moscow State Linguistic
University

〔図書〕(計1件)

金 鉉哲 外、『韓国民俗芸術事典(民俗
劇)』、ソウル:国立民俗博物館、2015 (デザ
ビ 129-131 頁、サンバジ 258-260 頁)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

金 鉉哲 (KIM HyeonCheol)

東北大学・高度教養教育・学生支援機構・講
師

研究者番号：80361210：

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：